

# Smith of Wootton Major の固有名詞の働き

白 井 義 昭

## I

トールキン (J.R.R. Tolkien) は今世界で最も広く愛読されている作家と言えよう。特に彼の『指輪物語』 (*The Lord of the Rings*) は大人の御伽噺として各国語に翻訳され、最近ではアニメ映画も製作されるに至った位である。だが、このような大長篇でなく、小篇の中にも大人に面白く読める小品が数多くある。中でも小論で取り扱おうとする『星をのんだかじや』 (*The Smith of Wootton Major*) には、作品中の固有名詞に意味を持たせ、それらの意味を理解しつつ作品を読めば、作品の味わいが濃くなっていく手法、こう言うのが憚られるとすれば、筆の進め方がされている点で、大いに興味をひく作品であると言えるだろう。

小論は、以上のことを踏まえ、『星をのんだかじや』における地名、人名の固有名詞に焦点をあて、この作品の一つの解釈を試みようとするものである。

## II

妖精の国から来たプレントィス (Prentice) ことアルフ (Alf) が作ったケーキを食べ、その中に隠されてあった星を飲み込んだ鍛冶屋の息子スミスサン (Smithson) [長じてスミス (Smith) となる] は、この星の力により、妖精の国への出入りを許される。だが、このことも無限に続くわけには行かず、いつか星を誰かに譲る必要が生じる。そして、その時がやってくる。スミスが、妻の妹の子であるティム (Tim) が星を飲んだのを見とどけ、さらに妖精の王であるアルフが妖精の国へ帰ることで、この物語は終了する。邦訳で『星をのんだかじや』となっているこの物語は、即物的なノークス (Nokes) という人物と好対照をなす主人公スミスの浪漫性を描くと共に、この浪漫的な人生も終焉を迎えねばならぬという、人間の厳しい現実を描いた、深い意味を潜ませた作品と言えるだろう。

さて、以上の様な内容を持つこの作品で、オックスフォード大学の古代・中世英語と英文学の教授という職歴を持つトールキンは、言語学者らしくと言うべきか、大部分の固有名詞に何らかの意味を与えている。こうした創作方法により、一種の言葉遊びをしていると同時に、読者に解釈上の手掛かりを与えている。平明すぎて、面白みに欠ける場合も二・三あるが、大部分においては、地口合わせが見られたり、あるいは真面目に考えさせたりする。以下において、まず地名を、次に人名を論じてみたい。

## III

地名に関しては、当然のことながら、表題の Wootton Major を最初に取り上げるべきであろう。<sup>4)</sup> この Major や Wootton Minor (p.107) の Minor は自明すぎて言及するまでもない。だが、Wootton はどうであろうか。この語のヒントは “Wootton Major it was called because it was larger than Wootton Minor, a few miles away deep in the trees” (ibid.) にある。つまり、この引用部分から Wootton とは ‘Wood-en’ の変形ではなかろうかと推察されるわけである。勿論、‘Wooden’ と言っても現代我々が用いている形容詞としての意味ではなく、むしろ ‘Woody’ という意味で使われていると解釈すべきではあろうか。つまり、Wootton Major と言ひ、Wootton Minor と言うことは、それぞれ ‘Large Woods,’ ‘Small Woods’ の意味を表わすと解して良さそうである。Wootton を森と結びつけることが不合理でないことは、この村の住人であるスミスに関し、“For by that time he was the best smith between Far Easton and the Westwood and he could make all kinds of things of iron in his smithy.” (p.117) と言われていることから明らかである。引用文の Easton とは ‘Eastern’ の意であろう。すると、この引用の意味は「森の東端から西端まで」と取ることも可能であり、従って、ここから Wootton という場所は森の中にあると考えるのが自然になってくる。こうした森との連想を働かせる名称は、妖精物語の雰囲気醸し出すのに与って力がある。

スミスが妖精の国を旅する段になって、色々な地名がでてくる。彼が大きな山々を回って辿り着く所は、荒涼たる浜辺であるが、この海は “the Sea of Windless Storm” (p.120) と名付けられている。この海は、その名が示す通り、嵐の様子は見えても、風はそよとも吹かない不思議な海である。トールキンは次の様に描写している。

He stood beside the Sea of Windless Storm where the blue waves like snow-clad hills roll silently out of Unlight to the long strand, bearing the white ships that return from battles on the Dark Marches of which men know nothing. He saw a great ship cast high upon the land, and the waters fell back in foam without a sound. (ibid.).

次いで、スミスは妖精の国へ入って行く。それには先ず、Outer Mountains を通り、さらに Inner Mountains を経て行くのであるが、これも文字通りの意味で解釈されるべきものである。

この「内山」を越えて、スミスが見たものは「常朝の谷」(the vale of Evermorn)であった。これは名の通り、朝の清々しさを常に漂よわせている谷である。空気はどこまでも澄みきっている。“There the air is so lucid that eyes can see the red tongues of birds as they sing on the trees upon the far side of the valley, though that is very wide and the birds are no greater than wrens” (p.124). また、この世を暗闇としてとらえ、妖精の国を朝ととらえる結果、妖精の国の明るさが強調されている。“As he set foot upon the grass of the Vale he heard elven voices singing, and on a lawn beside a river bright

with lilies he came upon many maidens dancing” (pp.124-126). さらに、朝は季節にたとえるならば春にあたるためか、この谷には “the Vale of Evermorn where the green surpasses the green of the meads of Outer Faery as they surpass ours in our springtime” のごとき春への言及も見られるのである。

スミスが食べたケーキを作ったのは（と言うよりも作るように指示したのは）当時の料理長のノークスであった。この人物の名前にも意味があると思われるが、それは後で人物の固有名詞の所で触れることとして、この男は “Nokes of Townsend” (p.137) と言われており、Wootton Major の Townsend 出身者ということになっている。ところで、この地名は ‘town’s end’ の意味を持っていると考えられる。彼が町の中央でなく、外れの出であると暗示することにより、ノークスなる人物は Wootton Major の他の人々から大分かけ離れた存在であることを、作者のトールキンは述べたかったのかも知れない。

以上の例から窺えるように、概して、この作品における地名は、一目見ただけでその意味するものが何であるかがわかる平明な名がつけられていると言えるだろう。だが、一箇所だけ平明な中にも象徴的な意味を持たせた使い方がされているのがある。それは今しがた例にあげた Townsend が見える同じページにでてくる ‘All the way from Daybreak to Evening’ である。この文は、スミスが妖精の王のアルフから、額につけておいた星を誰かに譲る時が来ていると知らされ、それでは甥のティムに譲ろうと決心し、長い妖精の国の旅から家に帰ってきた時、息子と交わした次の会話の中に見られる。

‘How tired you look! You have walked far, maybe?’

‘Very far indeed, my son. All the way from Daybreak to Evening.’

猪熊葉子氏の訳は次の様になっている。

「ずいぶんお疲れの様子ですね。きっと長いことお歩きになったのでしょうか？」

「ああ、全く長いこと歩いたよ、息子や。夜明けから夕方まで歩きづめだったのだ。」<sup>(2)</sup>

だが、この訳は正確さに欠けており、原文の意を十分に伝えているとは、言えない。原文の ‘You have walked for, maybe?’ の ‘far’ を「長いこと」と訳しているが不正確である。「遠くまで」とすべきものだろう。そうしなかったために最後の ‘All the way from Daybreak to Evening.’ も引用の様に訳してしまった。だが、Daybreak と Evening は大文字で書き始められているのであるから、地名と考えるべきではなからうか。つまり、原文の真意を表現するためには『「夜明」から「夕方」までずっと歩いてきた』とすべきではないのかと思うわけである。スミスが言おうとしているのは、朝から晩まで歩いたというのではなくて、まだ十歳に満たない時に、二十四年祭で飲み込んだ星の力によって、夢と希望をもたらす、夜明に譬えられるべき妖精の国を訪れることが可能となったが、この楽しい旅路も終わり、夕方にも譬えられるべき現世に戻ってきた、ということと言おうとしているわけである。つまり、Daybreak とは妖精の世界であり、Evening とはこの現世を暗示しているものなの

である。あるいは、さらに拡大解釈して、今までの楽しかった人生を Daybreak と取り、それも終わりに近づき、妖精とは全く縁が切れて、この世で余生を送るだけの侘しい人生を Evening になぞらえていると取っても良いかも知れない。いずれにせよ、この“Daybreak to Evening”は単なる「夜明けから夕方まで」ではなく、スミスの妖精体験との関連で解釈されるべきである。この意味で、この地名は *Smith of Wootton Major* の中では、最も際立って象徴的な役を果していると言えるだろう。

#### IV

地名はこの位にして、次に人名を見て行きたい。こちらはかなり考えさせるものがあり、それだけに、一旦その意味内容が把握できると、本文の理解も一層深まる所となる。トールキンが実際のところどれほど固有名詞に気を配っていたかは、主人公の名前の取り扱い方から容易に推察できよう。鍛冶屋の息子であった主人公は、父の生存中は *Smithson* と呼ばれていたが、父が死亡し、父の跡を継いでからは、息子を示す ‘son’ が取れ *Smith* だけの名になる。また、物語の中程に進むと、飲み込んだ星を額につけていたので、*Starbrow* つまり、「星びたい」という渾名までつけられる。このようにトールキンは、命名に細かすぎる位の注意を払っているのである。

既に触れておいた様に、この作品にはアルフという人物がいる。実は彼は、妖精の王である。彼のアルフという名は、妖精の王に全く相応しいと言えるのであるが、このことを以下において説明しようと思う。Alf が Alfred の別称であるのは周知のことだが、この Alfred は OE においては ‘elf in counsel’, つまり言い換えるなら ‘good counsellor’ という意味を持っていたのである。<sup>4)</sup> ノークスのパン作りの相談相手でもあり、さらにはスミスの人生相談の良き相手でもあったことから知られるように、アルフは文字通り ‘good counsellor’ である。このことと、彼が妖精の王であり、本当の elf であったことを考慮すれば、Alf という名が彼に相応しいことが納得できるであろう。蛇足になるが、彼はまた村人からプレントイス (Prentice) とも呼ばれていた。これは当然「弟子」(apprentice) の意味である。

旅行好きのために、ライダー (Rider) と呼ばれた<sup>4)</sup> 前の料理長 (Master Cook) が何の前触れもなく突然村を去った後、彼の後釜に据えられたのは、先程触れたように、Townsend に住んでいたノークス (Nokes) という男であった。トールキンはこう命名することにより、ノークスの何たるかを読者に知らせている。なぜならば、Nokes とは ‘No cakes’ あるいは ‘not [good at making] cakes’ のことだからである。この男が料理長になれたのは、料理が上手だったからではない。村人が ‘At any rate he won't go off without notice’ と言い、‘and poor cooking is better than none. It is seven years till the next Great Cake, and by that time he should be able to manage it.’ (p. 110) と言っている理由でなったのである。彼は先代の料理長の弟子であるプレントイス、つまりアルフをそのまま弟子にしたが、しかし、ノークスは教える立場にいるどころか、反対にこの弟子からこっそりと料理のコツを習う仕末である。<sup>5)</sup> また二十四年祭のケーキにしても、名目上はノークスの作となっているが、実際は “In time the Cake was made and baked and iced, mostly by Prentice.” (p. 112) とあるように、プレントイスの手になったものであるし、このケーキに乗せる「妖

精の女王」(Fairy Queen) にしても

‘As you are so set on fairies, I’ll let you make the Fairy Queen,’ Nokes said to him.

‘Very good, Master,’ he answered. ‘I’ll do it if you are too busy. But it was your idea and not mine.’ (ibid.).

から窺えるように、プレントイスにさせたのである。名前から料理下手が窺える次第である。ノークスがケーキを作ったあの二十四年祭から二十四年の月日が流れた今、彼はもう引退し、かわりにアルフが料理長になっている。彼には新しい弟子がいて、その名をハーパー(Harper)と言った。一見、この弟子の名には、重要な意味が含まれている様には見えないが、少し考えてみると、意外なことに気付くことになる。‘harp’ という動詞があるが、これは ‘to harp upon a string’ などの形を取って ‘to repeat a statement or dwell on a subject to a wearisome or tedious length’ とか、あるいはそこから ‘harp on’ だけで ‘to dwell wearisomely upon in speech or writing’<sup>(6)</sup> という意味を表現することは、周知の通りである。ハーパーという名は、この動詞 ‘harp’ との関連で解釈すべきではないだろうか。なぜかと言うに、一つには料理長に関して、二つには星を飲む子供達に関して、次のように考えられると思うためである。第一の点に関しては、今まで料理長がライダーからノークスへ、ノークスからアルフへと引き継がれてきたわけだが、ハーパーの場合も、アルフが村を出るに際し、‘In a day or two I shall be going away. Master Harper is quite ready to take over. He is a very good cook, and as you know he comes from your own village.’ (p. 145) と言っていた事から、彼が次の料理長になると考えられる。つまり、今まで続いてきた料理長引き継ぎのパターンは、ハーパーにおいても跡絶える事なく、繰り返される訳である。第二番目の点に関して、同様な事が言えよう。なぜなら、ノークスが料理長の時にはスミスが、アルフの時にはティムが、それぞれ星を飲む子になったのだが、自然の経過として、ハーパーが料理長になった暁にも、新しいスミスやティムが誕生し、同じパターンが繰り返されるだろうと推察できるからである。以上の二点から、ハーパーには「繰り返し」がつきまわっていると考えられる。そしてこの事が、この名の ‘harp upon a string’ との結び付きを深く印象づける訳である。

それでは、次の人名に移ろう。同じく少年である。スミスはアルフの勧告通り、額の星を誰かに譲ることとし、その相手をティム(Tim)に決める。この子はノークスの曾孫であると同時に、スミスにとっては、妻ネル(Nell)の妹の子であるから、甥にあたる。さて、彼の名の Tim とは Timothy の愛称である。周知のごとく、Timothy の本来の意味は ‘honouring God’<sup>(7)</sup> である。キリスト教世界における絶対者は神であるが、*Smith of Wootton Major* の妖精の世界においては、妖精の王が神に代わり得る存在である。従って、キリスト教世界で、‘Tim’ が ‘honouring God’ を意味するのであれば、妖精の世界を扱っているこの物語における ‘Tim’ は、‘honouring Fairy King’ を意味するとも考えても良いのではないか。ティムがスミスやアルフの好意により、星を飲む幸運に恵まれ、それ以降は妖精の王を敬うであろうことを考えてみると、なおさらそう思われる。

今まで取り上げてきた人名は、作品のテーマの全体的な理解の上で、大なり小なり関係を持ち、見過ごしてはならぬものであった。だが、そうではなく、単に言葉の遊びと思いき例も二・三見えるので、最後にこれらに触れてみたいと思う。これらの例は、すべて、ノークスが二十四年祭のケーキに入っていた星は一体誰が飲み込んだのかを、アルフを相手に、色々推測する場面にでてくる。

先ず、最初の例は、モリー (Molly) という女の子についてである。彼女に関し、次の様に書いてある。

'I can recall all the children's names. Let me think. It must have been Miller's Molly! She was greedy and bolted her food. She's as fat as a sack now.'

'Yes, there are some folk who get like that, Master. But Molly did not bolt her cake. She found two trinkets in her slice' (p. 141).

ここのポイントは二つある。一つは誰でも気付くように 'She's as fat as a sack now' と "Miller's Molly" にある。つまり、粉屋のモリーが粉袋と同じ位に太っている、という所である。もう一つは、Molly という名に鍵がある。実は、Molly は 'Mary' や 'Milicent' の愛称であると共に、ボルトの商標名でもあるのである。<sup>⑧</sup> Molly=bolt ということを踏まえると、ノークスの台詞の "She was greedy and bolted her food" やアルフの "But Molly did not bolt her cake" におけるトルキンの言葉遊びが理解されることであろう。

トルキンは同じ様な遊びをさらに続ける。モリーの次には Cooper's Harry という少年が話題になっている。彼について、ノークスは、'Well, it was Cooper's Harry then. A barrel of a boy with a big mouth like a frog's.' と言っている。ここの面白さは、'Cooper' と 'barrel' との関連にあると思われる。というのは、'Cooper' とは勿論桶屋や樽屋を意味するから、これとの結びつきで 'a barrel of a boy' という表現ができた、と思われるからである。<sup>⑨</sup> 同様な事は、三番目の例としての Draper's Lily にも見られる。リリーに関し、ノークスは 'Then it must have been that little pale girl, Draper's Lily. She used to swallow pins as a baby and came to no harm.' と言っているが、ここのポイントは言うまでもなく、'Draper' と 'pins' にある。'Draper' とは反物商、服地屋の意味を持ち、ピンと切っても切れない縁があるからである。

## V

以上の様に、トルキンは地名、人名に、それぞれ何らかの意味を持たせ、読者がその意味を一つ一つ探って行けば、内容の理解が深まるようにしている。さらには、最後の三例に見えるように、言葉遊びをして、読者を笑わせようともしているのである。固有名詞に含まれている、こうした意味を知らなくとも、この物語は理解できようが、しかし、十二分に理解したとは言えないであろう。

固有名詞の問題に関し、『鐘』や『砂の城』で知られる英国女流作家のアイリス・マードック女史 (Iris Murdoch) は、かつて筆者の質問に答え、作家は登場人物の名前によって、

それらの描き方に何らかの影響を受けるものだから、私としては、できる限りその影響を少くするため、電話帳から無作為に名前を拾い、一応作品が完結した段階でその名を作中人物につけるようにしている、と言っていたが、<sup>(9)</sup> トールキンの場合は、マードックとは正反対に、最初から固有名詞を活用しようと目論んでいたかに見える。そして、我々のこの推論を支持してくれるかのように、トールキンは、彼自身次の様に語っている。

書くときには、私はいつも名前からはじめる。私に名前を与えよ、そうすれば私は一つの物語を生み出すのだ。<sup>(10)</sup>

### 注

- (1) テキストは J.R.R. Tolkien, *Tree and Leaf, Smith of Wootton Major, The Homecoming of Beorhtnoth* (London: Unwin Paperbacks, 1979) による。なお、以下においては、*Smith* と略す。
- (2) 吉田新一・猪熊葉子・早乙女忠共訳『トールキン小品集』（評論社）p.152.
- (3) 研究社『新英和大辞典』, 'Alfred' を見よ。
- (4) "Rider was his name, and he was a great traveller," *Smith*, p.135.
- (5) "Indeed he [Nokes] learned a lot from him by watching him slyly, though that Nokes never admitted" *Smith*, p.110.
- (6) *OED*, 'Harp' v. 2 & 3.
- (7) See *OED*, 'Timothy.'
- (8) *The Random House Dictionary of the English Language*, 'Molly': "Trademark. an expansion bolt having a split, sleeve-like sheath threaded at one end so that when inserted snugly into masonry the turning of the bolt draws the ends of the sheath together, thus spreading the sides."
- (9) 猪熊女史は、この個所を、『そんなら大工のところのハリーだろう。』（『トールキン小品集』 p.157）と訳しているが、「大工」という訳は不的確で、これではこの面白みは伝わらない。
- (10) 昭和52年12月ロンドンで催された「英潮社ロンドン・セミナー」における講演において。
- (11) 『児童文学世界』No.2（中教出版）所収の原昌氏による「冒険的な旅のファンタジー」（p.30）より引用。